

春になったら羊の毛刈りをします。
その羊からとれた一頭分の羊毛を、フリース=FLEECEといいます。
ウールクラッサーの仕事は、毛質の良し悪しを判定し、
ダメージウールを切り捨てることではなく、
毛質それぞれに合った用途を考え、量をまとめて、
加工しやすくすることだと私は思っています。



本出ますみ
Masumi Honde

通称 ponta

ウールクラッサー (Wool Classer・ウール格付け人)

羊の原毛屋 SPIN HOUSE PONTA. そしてスピナツ出版代表。

1958 年生まれ、1984 年に京都で原毛屋を始める。

1991 年にニュージーランドのリンカーン大学にて、ウールクラッサーの資格を取得。2012 年より正倉院花氈の素材を研究。

スピナー、羊飼い、メーカーをつないで「羊と羊毛のある暮らし」を模索する羊マニア。

著書

『羊の本 ALL ABOUT SHEEP AND WOOL』(2018) スピナツ出版

『世界のひつじめぐり』(2016) グラフィック社

『正倉院紀要』37 号 (2015)、42 号 (2020)

正倉院の花氈に関する報告－素材－、宮内庁正倉院事務所



SPIN HOUSE PONTA.

SPIN HOUSE PONTA.
MASUMI HONDE

〒603-8344
京都市北区等持院南町 46-6

46-6 Toujiin,Minami-machi,Kita-ku,
Kyoto,Japan 603-8344

tel 075-462-5966 fax 075-461-2450
<https://spinhouse-ponta.jp>
sheep@spinhouse-ponta.jp



「スピニハウスポンタ」の公式 LINE アカウントに登録していただいたら、月に 1 ~ 2 回、本出ますみからの情報（新着羊毛、イベント、ワークショップのご案内）が届きます。

02

英国、ニュージーランド、豪州、日本の牧場からやってきたフリースには、
牧場の草の匂い、羊の匂いがします。

羊の毛を紡いでいると、何千年前の人も、こうして糸を紡いで、自分の服を作っていたのかなあと思います。
糸を紡ぐこと。それは自分で考え、工夫して、喜びを見つけること。

糸車を回していると心が落ち着きます。何があっても糸紡ぎをしていれば生きていける。愛と自信をもらう…、そんな気がします。



1 メリノ 3 ウェンズリーディール 5 ポロワス 7 ゴットランド 9 ブルフェイスレスター 11 NZ.ロムニー
2 リンカーン 4 蒙古羊 6 ハードウィック 8 チェビオット 10 リンカーン 12 マンクスロフラン



人が羊を
家畜化したのは約一万年前、
その品種は 3000 種?とも言われています
(学者により、ジャンルにより、分け方数え
方は色々)。その土地の環境、その時代の人のニーズ
によって、羊の品種はさまざまに枝分かれし、ブラン
シュアップされてきました。もっと大きな羊が欲しい、たくさん仔羊を生んでほしい、乳のとれる羊、毛の細い羊、毛量の多い羊、お尻に脂を蓄える羊…と、人間の欲望と創意工夫で羊はその姿とキャラクターを変化させてきました。
羊の歴史は、そのまま人類の歴史のようです。その間、
人は羊をオオカミや野犬などから守り、そのかわり羊は人に乳、肉、羊毛、脂、糞を与えてくれました。そして…、羊は人についてきてくださいました。

糸を紡ぐ
羊毛に包まれる幸せ
静かな暮らし



03



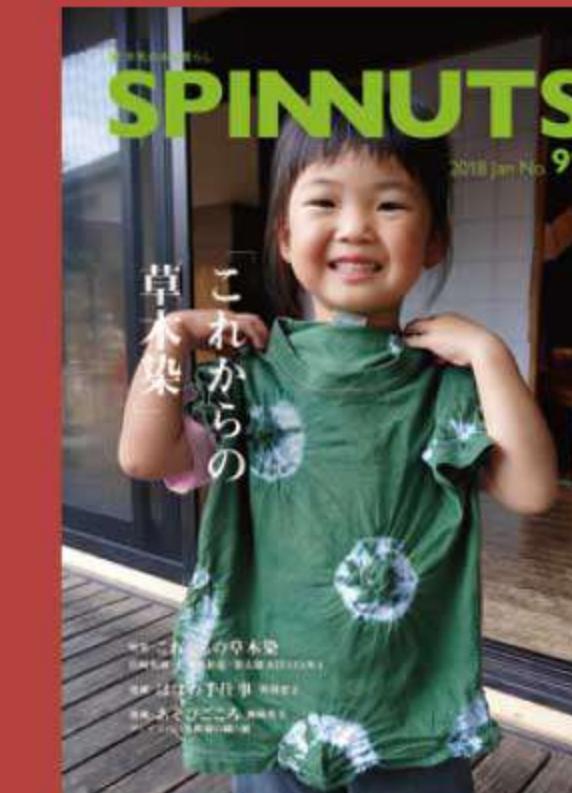
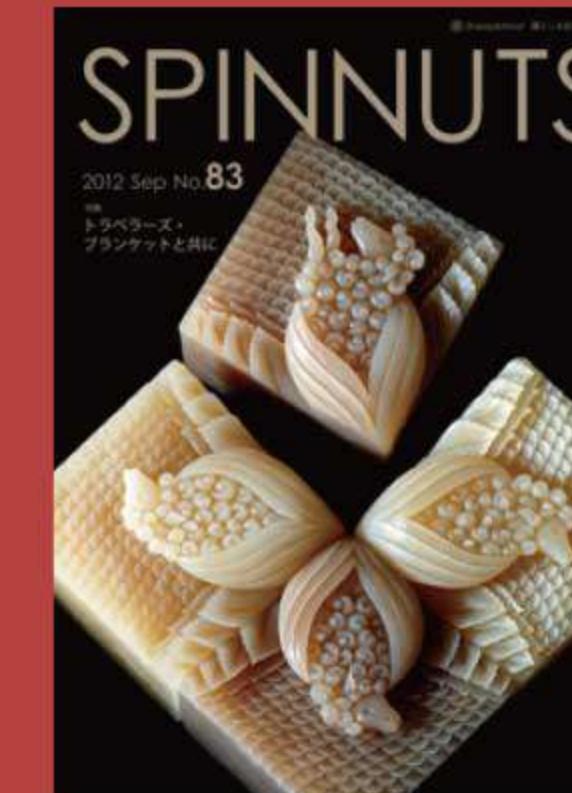
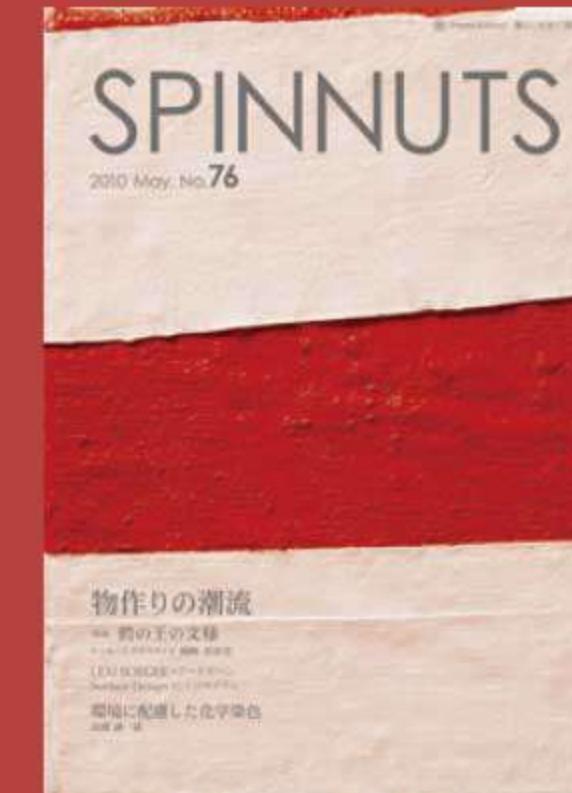
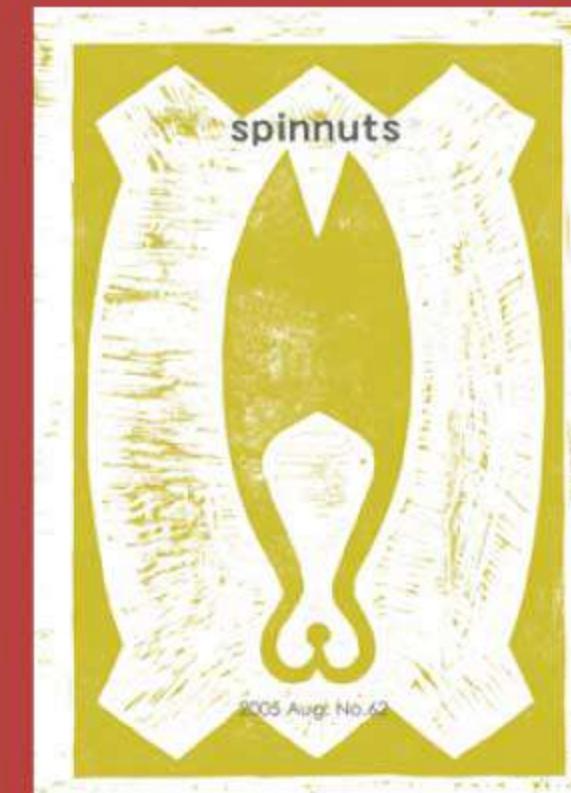
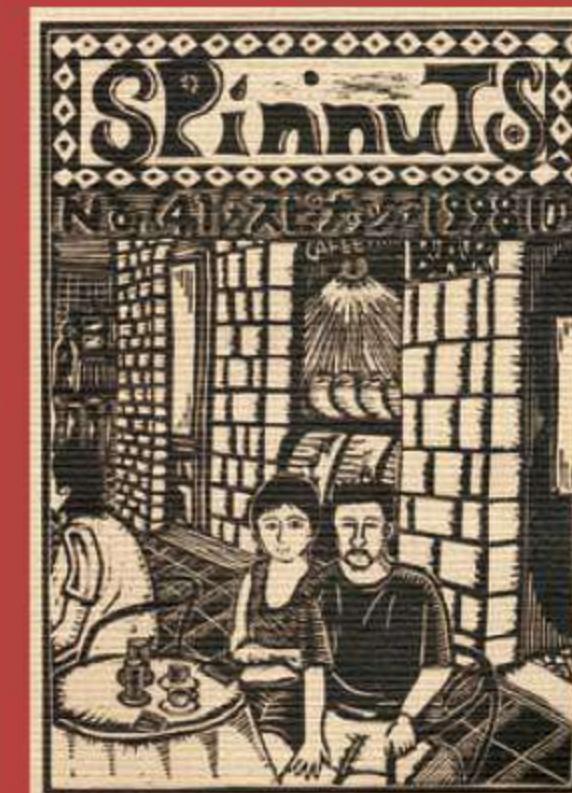
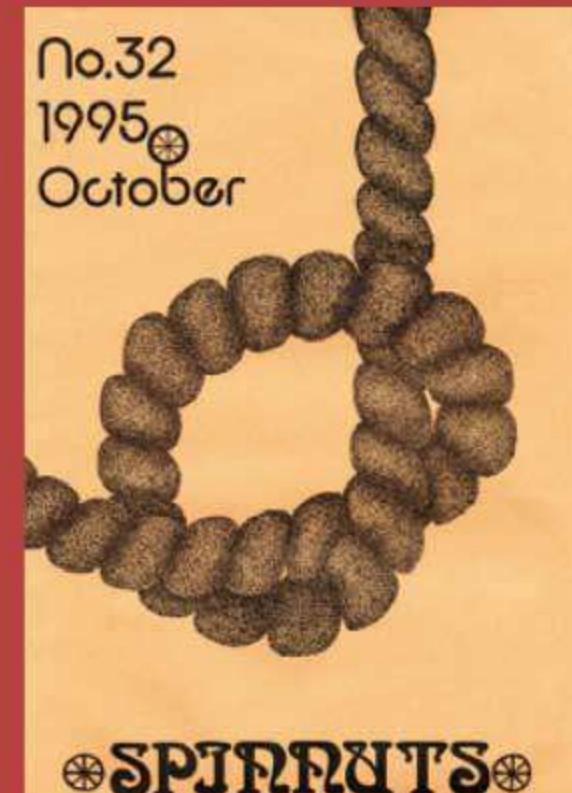
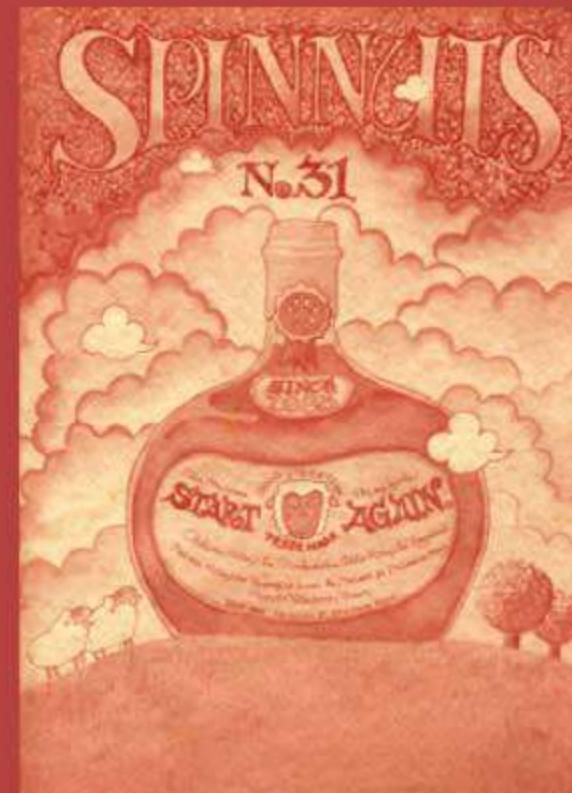
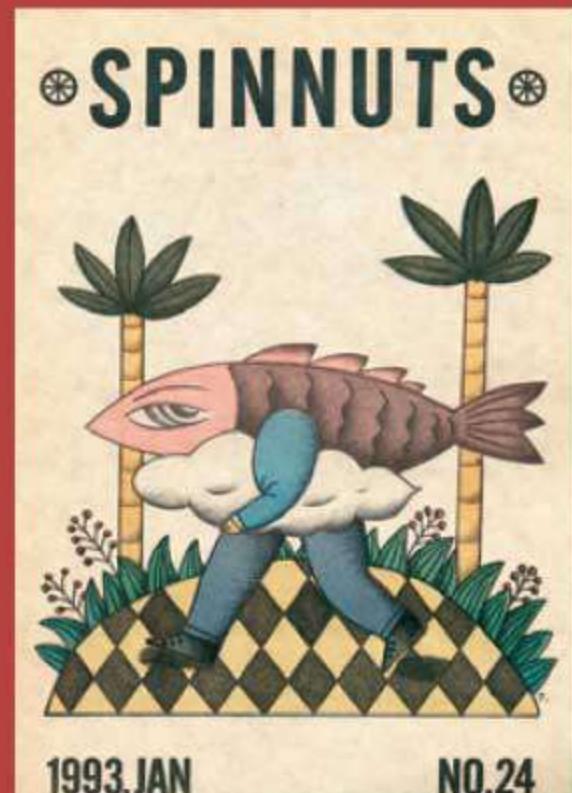
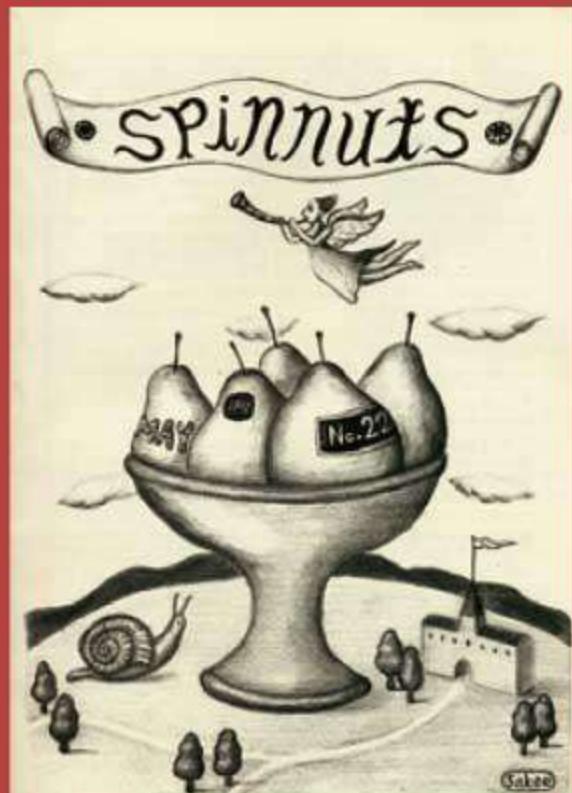
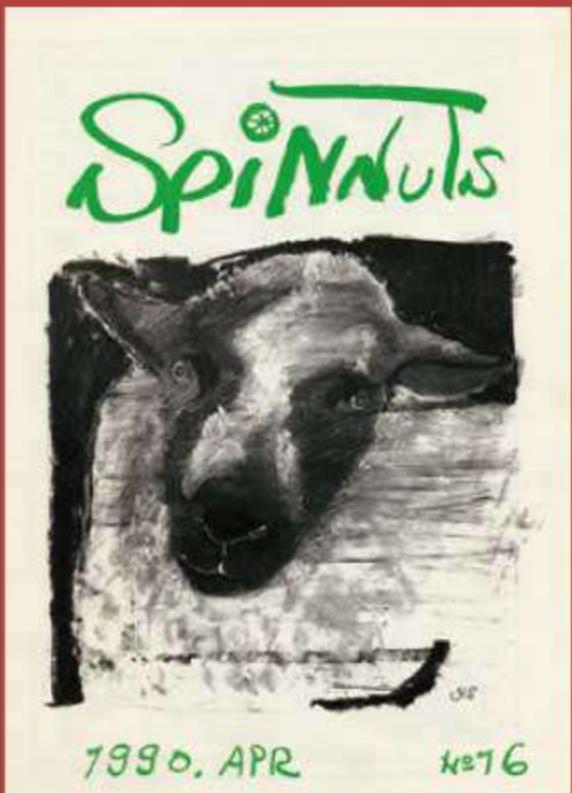
SPINNUTS PUBLISHER

The Life with Sheep & Wool



雑誌『SPINNUTS』(年2回発行・実物見本付き)

左 SPINNUTS. No.23 (1992)
右 SPINNUTS. No.101 (2018)



1983 年原毛屋になると決心し、豪州から持ち帰った 3 頭分のフリースを友人に見せたことからすべては始まりました。

「羊の毛ってきれいでしょ！」と自慢したかったのです。

でも、フリースのことをちゃんと説明できなくて、翌年情報誌「SPINNUTS」を始めました。

SPIN (紡ぎ) + NUTS (夢中)

紡いだり染めたりしていて、感激したこと、びっくりしたことを人に伝えたくなった時、どうしたらいいかわからなくなったら、言葉にしたら誰かが応えてくれる。そんな場が欲しい、そんな気持ちでこの雑誌を始めました。

そしてこの 30 年は次々と扉が開いていきました。不思議な羊の扉、それが SPINNUTS です。



単行本できるシリーズ
糸紡ぎ、フェルト、原始機、カード織、トワイニングなど、技法書

『羊の本-ALL ABOUT SHEEP AND WOOL』(2018)

FLEECE OF THE YEAR

羊飼いとスピナーをつなぐ

2011年秋、英国コツツウォルズの田舎にある Bed & Breakfast (朝食付き宿泊所) に泊まりました。

ネットで見つけたそこは小さな羊の牧場でした。玄関に “B&B of the year” という看板がずらりと並んでいました。

この牧場は 10 年金銀銅賞を受賞し続けた、英国では有名な B&B だったのです。

「そうか…、みんなこの受賞歴を知っていて、遠路はるばるやってくるんだ…」

日本の羊毛を知ってもらうにはこういうコンクールをすればいいんだ…、と思いました。

それがこの「国産羊毛コンクール」を始めたきっかけです。

日本には “こんなきれいなフリースがあるよ！” ということを自慢したくて始めました。

毎年 6 月 1 ~ 3 日、牧場自慢のフリースが、30 ~ 40 頭到着します。1 頭 1 頭格付けし、金銀銅のリボンを授与します。

このコンクールが、羊飼いとスピナーがつながるきっかけになればと思います。

04



JWP 交流会にて (2023) Photography:Hayakawa

原毛屋を始めた当初よりの私のコンプレックスは、

“…とはいってもスピナークラスは上位 2 ~ 3%、とびきり美しいフリースしか私は扱っていない” ということでした。

毎年毛刈りされる圧倒的大多数、90 数% の羊毛をスルーしているという後ろめたさがずっとありました。

最上のフリースしか牧場にリクエストしていない現実。

1998 年日本から羊毛を洗う工場がなくなり、いよいよ日本の羊毛は行き場をなくしました。

それから 20 年たった 2018 年、伊藤核太郎さんという一宮の製織工場の社長が京都にたずねてこられました。

「国産羊毛を使って製品がつくりたい」というのです。

それがこのジャパン ウール プロジェクトのはじまりです。

既存の羊毛産業は、「スーツを作るから、豪州メリノ 19 ミクロンを○トン注文する」という、

消費者のニーズからスタートする製品つくりです。しかし JWP の取組みは「ここに細い毛、太い毛、長いも短いも色々な羊毛があります。

品種はサフォーク中心に中太番手、これで何をつくれる?」という、今までとは違う、牧場からはじまる真逆のベクトルの製品つくりです。

すなわち「今ある環境、今ある資源、今ある工場と技術で、最短の加工工程で、どうすればより良いものがつくれるか。

そしてそれを喜んでくれる人に届けたい」という、今までとはまったく違うものつくりのシステムをつくることでした。

牧場の羊飼いにとっても、工場の経営者や職人にとっても、今までと違う試行錯誤の連続となりました。

日本の羊の毛の特長が生かされ、日本の羊毛製品として、

かかわった一人一人が「私が創りました。」と胸張って自慢できることを目指して。

JAPAN WOOL PROJECT (JWP)

羊飼いとメーカーをつなぐ

05